

副詞の日仏語対照研究

—「まだ」・「また」と《encore》—*

青木三郎

1. 「まだ」

仏語の副詞の *encore* は、

- (1) *Pierre est encore malade.*
- (2) *Pierre travaille encore à cette heure-ci.*
- (3) *Il est encore tôt.*

などの文において、日本語のマダと意味的に対応するところがあり、例(1)~(3)はそれぞれ、

- (1)' ピエールはマダ病氣だ。
- (2)' ピエールはこんな時間にマダ仕事をしている。
- (3)' マダ早い。

と訳されるのが普通である。しかし、周知のとおり、日本語のマダには *encore* の反復的用法、即ち、

- (4) *Pierre a encore gagné.*
(ピエールはまた勝った。)

のような用法は存在せず、反対に、*encore* には、日本語における

- (5) 入社してマダ三日目の新米です。

などに相当する用法がない。例(5)の場合、マダは、仏語の *seulement*, *ne~que* に近い意味価値をもつ。これだけをながめても、マダと *encore* が同一の機能を有するとは考えにくい。しかし例(1)~(3)が日本語で例(1)'~(3)'に対応すると理解されるためには、両語に何らかの共通な機能が存在すると考えるのも自然である。

我々は、ここで当然次のような問いを発することになる。果して例(1)を「マダ病氣だ」とする解釈は正当化できるのであろうか？

この問いに答えるためには、日本語のマダの用法を調べ、マダの機能と文脈

的条件を明るみにする必要がある。ひとたびマダのはたらきが理解できれば、「マダ病気だ」の意味がどのように組み立てられているのかをはっきりと示すことが可能となる。そこで *encore* との対照的な扱いにより、両語の類似と相違が浮き彫りにされるのである。

* * * *

マダと *encore* の相違を明らかにするには、マダが使えて、*encore* と対応しない文を論じることから始めるのが適当であろう。次の例を見てみよう。

(6) マダ五時だ。

(7) *Il est *encore* cinq heures.

例 (6) は日本語として自然に許容される発話であるが、例 (7) は仏語で非文である。例 (6) の意味に相応するのは、

(8) Il est seulement cinq heures.

(9) Il n'est que cinq heures.

のように、*seulement* や *ne~que* の構文である。*encore* は、話し手の現在より以前に事柄が成立確認しており、そしてその事柄が話し手の現在で改めて成立確認されることを表わす。従って例 (7) で、一度、発話時以前に、*il est cinq heures* としておきながら、なおも現在で *il est cinq heures* というのは矛盾しているのである。それに比し、例 (6) では、「あまり時間がたっていないようす」(『外国人のための基本語用例辞典』(p. 953))を表わすといえる。つまり、例えば、開演時刻が七時であるというような状況で、今の五時であるという状態は、まだ早い、時間に間に合うものと捉えられる。マダのはたらきで重要なことは、森田 (1978) の言うように、話し手の現在において、「基準点を越えていない状態」(p. 438)を表わすことと言えるであろう。この直観的な *encore* とマダのはたらきを認めるとすれば、

(10) (=1) Pierre est *encore* malade.

(11) (=1)' ピエールはマダ病気だ。

のちがいは次のように捉えることができる。例 (10) では、Pierre は発話以前に病気であり、それが話し手の現在で «ne plus malade» と一度規定されるが、あらためて「Pierre は病気である」と捉えなおされる。例 (11) では、「Pierre は現在すでに回復している」という予想を設定し、それを基準点とすると、現実には「Pierre は回復に到っていない」と判断される。結局、結果的には、Pierre の回復していない状態を表わしていることになり、意味的に等しいと感じられるのである。

マダの機能を一般化した形で表現するならば、この副詞は、まず基準として、予め P をたて、話し手の現在において、それに到らないものとして P' を定める、と言えよう。⁽¹⁾ この P 及び P' の内容は文脈により様々に変わる。

例えば、

- (12) 雪はマダ降っています。
 (13) 太郎はマダ勉強している。
 (14) マダ歩くぞ！
 (15) あら、この時計、マダ動くわ。

の例文では、時間的に変化してゆく「可変的な動作、現象」を表わす。例(12)では、P は、「雨のやんだ(やんでいる)状態」であり、P' は「雨のやんでいない状態」即ち、「雨の降り続いている状態」を示している。話し手の現在において、まず P がとりあげられ、そして P を基にして P' が定められる。話し手にとって引き受けることのできる対象は、P' である。マダは、将に、話し手の「判断の対象」を構築するのである。ただし、判断の形には断定とは限らず、疑問、推測などのムードが現れることもある。(例文(16)を参照)

- (16) 雪はマダ降って
 (いますか。
 いるだろうか。
 いるかもしれない。
 いるだろう。)

例(13)では、「勉強する」は「勉強しおわる」ことにより状態の変化を導入することができるから、P は「勉強をおえた(おえている)状態」、P' は「勉強をしている状態」を示すと言える。例(12)(13)では、～テイルにより、話し手の現在における進行中の状態として P' を問題にできるため、到達状態としての P は、話し手の現在以降に起こる(かもしれない)事柄として捉えられることになる。即ち、マダは話し手の現在において、(I)基準点 P をたて、(II)「未到達の状態」として P' を定めることにより、結果として、P を未来時に実現可能な事柄のして認識することになる。⁽²⁾

論ずるまでのことはないが、～テイルが、

- (17) かえるが死んでいる。

のように、結果の残存を表わす場合は、未到達の領域は問題にできないので、マダを使うことは不可能である。

- (18) *かえるがマダ死んでいる。

例(14)は、話し手の現在で、歩くという動作がこれからも続けて行なわれることを表わしている。この場合の「可変的事態」とは、歩きつづけることから

歩くのをやめることへの移行である。マダは、まず、基準として「歩くのをやめる」状態 P をたてる。換言すれば、「主体がこれ以上動作量をひきうけることをしない」領域をつくるのである。そして、話し手の現在で、話し手は、「主体の引き受ける運動がリミットに達していない」(P') 領域を設定する。リミットに達していないので、運動量は量の副詞に修飾されうる。例えば、

- (19) マダ $\left(\begin{array}{l} \text{もう少し} \\ \text{もっと} \\ \text{二時間} \end{array} \right)$ 歩くぞ。

などである。⁽³⁾ このように、動詞述語の基本形が意味的に動作量を含んでいると考える時は、話し手の現在において、動作量の《有効性》を問題とすることができる。動作量を問題にしない動詞述語の基本形は、次の例 (20)(21) のようにマダとは共起不可能である。

- (20) *マダ帰るぞ!

- (21) *マダ飛び降りるぞ!

ただし、副詞を援用したり、動詞述語に結びついた主格を数量化することにより、この共起制限を「解除する」ことは、次の例のような場合、可能である。

- (22) マダ $\left(\begin{array}{l} \text{時々} \\ \text{しばしば} \\ \text{たまに} \end{array} \right)$ 来る。

- (23) マダ $\left(\begin{array}{l} \text{何人か} \\ \text{2, 3人} \end{array} \right)$ 来る。

一般的に(数)量を問題にする時、マダは、話し手の現在において、話し手は、数量化可能な領域 (domaine quantifiable) を構築すると言える。例えば、

- (24) 理由はマダある。

では、理由の存在の集合が、現在において、マダ閉じていないもの、つまり数量化の可能なものと捉えているのである。

例 (15) は、例 (14) とちがひ、動作量の問題ではなく、時計のもつ性質の《有効性》を問題とする。時計は動かなければ時計の機能を果たさないという意味で、我々は、基本的に時計は動くものだという認識をもっているが、マダは、現在において、その時計の機能が有効ではない(なくなった)状態を捉え、それを基準にして有効状態の領域を設定する。つまり、量 (quantité) に対して、質 (qualité) の領域を構築するわけである。P を質的に無効となった領域 (domaine qualitativement ne plus valide) とすると、P' は、それに時間的に未到達の有効領域 (domaine validable) と捉えることができよう。また、動詞

述語が、所謂、「可能」を表わす場合も、マダのメカニズムは同様に理解されてよいであろう。

(25) このりんごはマダ食べられる。

(26) このボールペンはマダ書ける。

ただし、この場合においても、可能性は可変的な解釈のできるものでなければ、マダは使えない。例 (25) は、リンゴが時間的に、食べられる状態から（腐って）食べられない状態への移行を含みうるし、例 (26) も同様に、ボールペンが（インクが充分にあって）書ける状態から（インクを使い果し）書けなくなる状態への移行を考える。しかし、

(27) ?太郎はマダ英語が話せる。

のような例では、英語を話せる状態から話せなくなる状態を想像することは、自然にはできず、例えば、昔よく英語の出来た太郎が、年をとり、もはや英語を使わない生活をしているような状況を想像しなければならない。

マダは、また、程度を表わす述語とともに用いられることもある。

(28) お祭はマダこれから賑やかになる。

(29) 病状はマダ悪化するかもしれません。

例 (28)(29) は、それぞれ、賑やかさの程度、病状の悪化の程度を表わしている。例 (28) は、現時点で、確かに或る程度賑やかであることは認められるのであるが、その賑やかさの程度は充分な程度には到っていない。例 (29) では病状の悪化の程度が、まだひどくすすんだところまではいっていない。この程度の変化は、時間的に変化するものであると考えられる。マダは、話し手の現在における状態の程度を充分な程度に到っていないものとして把握するのであるが、マダそれ自体に程度性が備わっていると考える必要はないであろう。程度性の変化は、あくまで述語内容のものである。

或る事柄が段階的に変化することを想定した文脈においても、その初期段階を表わすのにマダが使われる。先に挙げた例 (5)(6) など、仏語で *ne~que* や *seulement* と対応する例がこれにあたる。この他に興味深い例として次の例を挙げておく。

(30) マダ日本に着いたばかりです。

例 (30) は、例えば、外国人で日本に着いた人が、生活に慣れずにいるというような状況を想像することができよう。つまり、この例では、他に経験として様

々なことが想定されるが、現在はその初期段階として捉えられるのである。同様に「近接過去」を表わす文でも、

③1) ?*マダ日本に着いたところです。

は奇妙に感じられるが、～トコロダの場合は、「日本に着いた」という事柄は段階的な解釈をうけないことが知れよう。

さて、ここまでの観察で、我々は、マダが、話し手の現在における「可変的」な状態の設定、量・質の有効領域の設定、程度の設定、段階の設定に関わるかを見た。Pの設定、「未到達」のP'の構築を常に話し手の現在で行うという点で、マダ一定した働きを担っている。さて、ここで比較判断の文脈に現われるマダについて検討しなければならない。

③2) あんな人と結婚するくらいなら、マダ独身でいる方がましだわ。

③3) 夫も花の都に電車が通っている所なら、マダシモだが、日向の延岡とは何の事だ。(夏目漱石『坊っちゃん』、『小学館日本語大辞典』p. 361より借用)

例 ③2③3) に見られるマダ(及びマダシモ)は、話し手の評価に関わるものである。評価とは、この場合、話し手が事柄について「良し・悪し」の判断を下すことと考えてよいであろう。マダは、話し手の評価の対象領域を設定し、言わば、「何処までが良いと判断できる対象か」をきめる。例 ③2) では、「独身でいること」は話し手にとって、基本的にはマイナス評価の事柄であると捉えられている。言い換えれば「独身でいること」は、話し手の「良い」と判断できる評価領域の外に位置するのである。

独身	結婚
┌──────────┴──────────┐	
良くない	良し

更に言いなおせば、「独身でいること」は、「良し」の評価領域の(最少限の)リミットを超えてしまっているのである。その次に、「独身でいること」の評価は、「あんな男と結婚すること」の評価と相対化される。「あんな男と結婚すること」は、話し手にとって、全く許容のできない、心外な、良くない事柄である。「良し」の評価領域を完全に超えてしまったものとして、この事柄は捉えられるのである。このように考えると、「独身でいること」が、そもそも良くないと判断され、「良し」の評価領域のリミットを超えていると捉えられながらも、

「あんな男と結婚すること」との比較では、相対的に、「良し」の評価域領を完全に超えていないものとして、「良し」の方に結びつけなおされる、という事情が理解されよう。マダは、やはりここでも「基準点を超えないもの」として機能している。ただし、評価の領域においては、対象の時間的変化は関係がない。時間が経過することにより、状態は変化し、質・量は漸強・漸弱を扱うことができるようになるが、「良し・悪し」の評価は、時間的に変化するものではなく、事柄の内容によって決まるのである。事柄を仮定し、事柄 A は許容できる、事柄 B はかろうじて許容できる、事柄 C は許容できない、というように評価領域の範囲を主観的に構築するわけである。

例 (33) は、赤シャツから、同僚の古賀が、故郷を離れ、日向の延岡に赴任することになったことを聞かされた「坊っちゃん」が、家に戻り、ひとりで憤慨している条である。この例でも、「家屋敷は勿論、勤める学校に不足のない故郷がいやになったからと云って、知らぬ他国へ苦勞を求めに出る」ことは、話し手（「坊っちゃん」）にとっては、「良し」の評価領域のリミットを超えている。しかし、他国へ行くにしても、都へ出ると日向のような田舎へ行くのとでは、後者の方は、全く話にならない。それに比べれば（即ち、それを基準とすれば）、都へ出るとは、「良し」の評価領域に位置するのである。

比較判断の文脈におけるマダには、もう一つ用法がある。『日本国語大辞典』が、「一つの事物・事態の状態が、他の事物・事態よりも、さらに一段と程度の進んださまを表わす。」(p. 361) と説明する用法である。次の例を見てみよう。

(34) T 氏の家も大きいと思ったが、N 氏の家の方がマダ大きいね。

(35) 確かに T さんも悪いけれど、N さんの方がマダ悪いと思うわ。

例 (34/35) のような場合、比較の基準は、話し手にとってすでに「充分な」程度を表わすものである。例 (34) では、まず T 氏の家は大きい、という話し手の認識がある。しかし、N 氏の家と比べれば N 氏の家の方がより大きいのである。マダは、この場合、X 氏の家が大きさが大きさのリミット（これ以上大きいものはないという最大のリミット）ではないことを表わしていると言えるであろう。X 氏の家の大さを超えたものとして N 氏の家があるが、N 氏の家の大さは、やはり大きさのリミットには達していないのである。例 (35) も T さんの悪さの程度は、最大のものではなく、悪さの程度にはそれ以上のものがあることを表わしている。このように、一度基準となる限界点を設けておき、その次にその限界点を話し手の現在において、到達していないものとして、言わばキャンセルしてしまうことがマダの機能である。⁽⁴⁾

2. 「また」

仏語の *encore* との対照で問題となるもう一つの日本語の副詞マタの考察に移ろう。マタと *encore* が対応するのは、反復を表わす場合である。

③6 Il est *encore* venu.

③7 彼はマタ来た。

例 ③6 が反復を表わすのは、事柄が非連続的に扱われるためである。即ち *encore* は、話し手の現在以前に < lui-*être* venu > という事柄が成立しており、それが話し手の現在であらたに認められたことを示すのである。 *encore* がマダ及びマタに対応するのは、従って、 *encore* の係る事柄が連続的(マダ)であるか、非連続的(マタ)であるかという捉え方の相違によると言える。日本語のマタは、しかし、必ずしも常に反復の意味を持っているとは限らない。述語が形容詞で性質・属性を表わす場合は、程度の強調となる。

③8 これはマタ面白い。／うまい。／素敵ね。

例 ③8 のマタは、面白さ、うまさ、「素敵さ」が格別であることを意味していると言えよう。つまり、話し手が通常認識している面白さなどの性質の領域の中で、格別の性質をとりあげ、他と区別をするのである。

では、例 ③7 の反復、例 ③8 の格別の用法に共通するマタはどのように規定すればよいであろうか。基本的に、マタは、問題としている事柄あるいは性質が他と区別されたものであることを表わし、かつ区別されながらも、区別された他のものとは同質の領域を構成していることを表わす。例 ③7 では、事柄の一つの *occurrence* として、他の < 彼一来る > という *occurrence* とは区別されているが、 < 彼一来る > という領域の *occurrence* であることに変わりはない。例 ③8 では性質を問題にするわけであるが、無論、性質の *occurrence* を構築することは直接はできない。性質の場合は程度の差異化による異なったゾーンが問題となる。即ち、「面白さ」の程度のさまざまなゾーンのうち、一つを区別し、他と異なるものとするのである。しかし「面白さ」の領域にとどまっていることにはかわりはないのである。ただし述語が性質を問題にする場合においても、

③9 独りで旅をするのもマタ楽しい。

のように、「～モマタ」の形で用いられる時は、格別に楽しいという解釈はできない。モにより楽しいもののクラスがたてられるために、他と同様、同程度に楽しいことになる。マタは、他にも楽しいことはあるが、話し手が他と区別し

て<独りで旅するのは楽しいことだ>という事柄を話し手の現在でとりあげているといえる。

このように文の内容を他と区別してとりあげるのがマタの基本的な機能であるが、文の内容が事柄を表わすときは、**occurrence** として異なると捉え、質的には等しいと考えられる。文の内容が事柄の性質・属性を表わす場合は、性質の程度に区別をもうけ、質的な異なりを問題にする。マタが文全体に係ると、文と文との接続のしかたを規定することになる。

(40) 私は古典語学にたずさわるもののはしくれとして、この作品のこころを汲むに役立つと思われる言葉の解釈を、いくつか提出してみたいと思う。マタ、この作品の内容をどう理解するかについて、少しばかり述べてみたい。(大野晋『源氏物語をよむ』p. 4)

(41) 黒部や野田らは、房次郎が突然だれにも告げることなく朝鮮へ渡ったとき、置き去りにされた妻子のために世帯をたたみ、帰洛の世話もした。房次郎が帰って来ると、またその住居を世話してやった。

黒部は、房次郎が持ち帰った大量の石の印材を、たのまれるままに預かったりもした。

さういふことは、おほく上にのべたやうな当時の南翰町界隈の、善良でのびやかな商人たちの気質よったであるう。一方マタ、房次郎の不思議な並み外れた腕、つまり才能を彼らが少なからず買ってゐたことも与ってゐた。(白崎秀雄『新版北大路魯山人』p. 123)

文の接続に関するマタをここで網羅的に論ずるわけにはいかないが、基本的には、例(40/41)で理解できるように、話し手が観点をかえて或る一つの論を構成する時にマタが現われるように思われる。例(40)では、まず話し手の P_1 という希望があり、同方向に向かう論として、 P_1 とは区別された P_2 を導くのである。 P_2 も、やはり、話し手の希望を表わしている。例(41)では南翰町界隈の商人が房次郎に対して好意的であった理由として、彼らの気質があり、そしてそれとは別の観点から、房次郎の才能という別の理由を挙げている。このように話し手の志向する文意に添うものを、他と区別し、他の観点から導入しようとするのがマタの文接続の基本である。⁽⁶⁾

ここで、話し手の別の観点という考え方をういたが、このことは、マタが疑問形と結びつき、驚き、意外性を表わすことを理解するにも重要な考え方とな

と思われる。

(42) マタどうして結婚する気になんかになったんだい。

(43) これはマタ一体誰のしわざだ！

例 (42)(43) に代表されるように、マタと関わる疑問は、単に相手に未知の情報を求めるのではなく、現実の事態に対し、話し手が判断を下せないことを表わす。従って、形態的には疑問であるが、内容的には、反語的、拒否的である。何故そうなるのかと言えば、マタがこの文脈では、話し手の立場を通常の話し手の立場とは異なり、判断のできない立場として規定するからである。その立場からみると、例 (42) のように「何故結婚する気になったのか」という理由はひとつもみつからないことになる。というよりも、正確には、「結婚する気になった」事態を話し手が認め得ない立場を設けるため、その事態をひきおこす原因、理由はみつかることができないのである。例 (43) も同様、マタは基本的に現実の事態（「これは」の表わす内容）を話し手が認めることのできない立場を設ける。その立場から、現実の事態をひきおこした者は誰かをたずねたとしても、話し手は誰をも認めることはできないのである。

このように、マタは話し手の立場を、言わば、ディスクールの基本的な関係である「話し手―聞き手」から区別し、別のところに話し手の立場を設ける。従って、単に相手に情報を求める疑問とは相容れないと考えられる。⁽⁶⁾

(44) マタ誰が来ましたか？

例 (44) でマタが反復を表わすことは言うまでもない。

以上マタについて、基本的な考えを示した。マタは、(1) 動作を表わす述語（来る、食べる、等々）(2) 性質を表わす述語（面白い、奇妙だ、等々）、(3) 文接続、(4) 話し手と文内容全体との関係などを規定する。その規定のしかたは一定して、定められた領域内で「他と区別する」ことである。

3. 「まだ」・「また」・《encore》

encore を考察の出発点とし、我々は、マダ、マタの機能について検討してきた。結語にかえて、考察の結果を（多少重複をおそれずに）まとめておきたいと思う。

encore は、青木 (1987) で論じたように、基本的には、或る文内容 P が基準時点以前に成立確認されており、その P が基準時点で再びとりあげられ、成立確

認められるのである。この二つの P が連続的に捉えられる時に、*encore* はマダと対応すると考えられ、反対に不連続的に捉えられる時は、マタと対応すると考えられる。

しかし、マダには *encore* のように常に「以前性」が備わっているわけではなく、重要な点は、話し手の現在において、「未到達」の領域を構築することである。その領域は、アスペクト的に捉えられる場合、程度、評価が問題になる場合などがあった。特に、評価を問題にする場合、「未到達」の領域は、時間的に構築されるものではない。マダは、話し手の現在における、話し手の判断の領域を構築するという意味で時間性と関わるが、事態の成立を時間的に捉えているのではないのである。C'est *encore mieux*. といえ、すでに C'est *mieux*. (より良い) のものが、なお更に良いと判断されるが、*encore* をマダ、*mieux* を「まし」と対応させるとマダマンになり、C'est *encore mieux*. と反対の意味になってしまう。

マタは、先にまとめたように、同質の領域内で、問題となる文内容を他と区別することがその本質である。Il est *encore malade*. の不連続的な読みは、将来に、「彼が病気であること」を *une occurrence distinguée* とするマタに通じている。ただし、マタの射程は、動詞述語に限らず、話し手の文内容に対する立場にまで及ぶ。

このように、*encore*、マダ、マタは、異なった働きを有しながらも、文脈により他の操作と絡み合い、結果的に同じような意味価値を生ずることもある。しかし、それぞれの語は、それぞれの言語体系の中で他の語と対立し存在している。*encore* は、文脈において *toujours*, *de nouveau*, *pour une autre fois*, *davantage* 等々との関係で捉えなおされなければならないであろう。マダは、今ダニ、マダマダ、ナオ等々と対比して吟味する必要があるし、マタについては再ビ、モウ一度、等々とのちがいを明確にしなければならない。さらに、特に、マタは仏語の文接続の *mais*, *et*, 更に *aussi* 等との対照的研究の必要性を示唆する。

我々が目ざす対照研究は、徒らに類義語の海におぼれる（または遊ぶ？）ことを目的とするのではない。言語活動において、何が一般化する性質なのかを（今のところ手さぐりで）探してゆくことである。我々は、本誌 11 号で *déjà* とモウをとりあげ、12 号で *encore* をとりあげ、そして今回マダとマタをとりあげ、共通して現われるものは何かを見ようとした。その結果、話し手（発話者）、話し手の立場、話し手の事態成立確認、話し手の評価、話し手の

現在、事態のアスペクト、質・量領域の限定などの考えを導入することになった。話し手、即ち「主体(S)」のパラメーター、アスペクト、即ち「時間」(T)のパラメーター、質・量パラメーター (Quantité/Qualité)、そしてこれらのパラメーターの対象となる文内容(概念)の構成などが問題となるのである。これらの理論的研究は、次回の課題である。

[注]

* 本研究は、昭和62年度筑波大学学内プロジェクト研究・奨励研究「副詞の日仏語対照研究」に於ける研究成果の一部である。

- (1) R. Martin (1980) は、「encore」について、J. M. Zemb との議論の中で、「L'unité de *encore* est sans doute dans la notion de «limite non atteinte». Mais je conviens que c'est vague.」(p. 180) と述べている。「limite non atteinte」という考え方は、将に、我々の見解では、「encore」ではなく、マダにふさわしい考え方である。
- (2) 石神 (1978) もマダは、「前提事象に達していないものとしての現実事象としてあることの把握の表現」(p. 35) であると考えている。我々も基本的にこの考え方を支持するものである。ただし、(我々の読みが誤っていなければ) 石神は、「事象(x)は時点Pで現実において事象(y)に変化するものとする」(op. cit, p. 35) と考えている。彼は続けて、「マダ」という表現が存立するためには、時点Pより以前の時点Qで事象(x)は事象(y)に変化する、という予想を以って、前提としての事象(x')・事象(y')を設定する。そして、時点Qと時点Pとの間に、素材としての事象を直接とりあげる現実の立場時Rがあるのである。」(p. 36) としているが、我々の見解では、石神の言う時点Pにおける事象の変化は、もともと大前提としてあるのではなく、話し手の現在におけるマダによる現実の把握の結果、生じるものである。時点Pによる事象の変化は、マダが時間的に可変的な対象(マダ中学生だ、マダ若い等)を扱う場合は問題ないが、マダに本質的に備わったものとは思われない。後で見るように、マダが比較判断、特に評価を問題にすると、時点Pによる現実の事象の変化は考えにくいからである。(例えば、森田 (op. cit) の例: あんな学校に行くくらいなら、浪人した方がまだいい。/この方がまだ(しも)まだだと思う。(p. 440) 参照)
- (3) 「マダ歩くぞ」のタイプと共に起る副詞の記述的研究はそれ自体興味深い研究となるが、ここでは行なわない。
- (4) 「マダ悪い」は、更に悪いという解釈を受けるのが普通であるが、それに対し、「マダいい」は、更にいいのではなく、かろうじていいと解釈されやすい。何故であろうか。ここで注意すべきは、解釈されやすいというだけであり、「マダいい」が更にいいと解釈することは不可能ではないことである。「Aもいいが、Bの方がマダいい」と言えば、更にいいという解釈が成立する(ただし、ネイティブ・スピーカー

によっては、問題なく許容する人と、許容するのをためらう人とがいる。)「いい」のかわりに「おもしろい」にすれば、「マダ面白い」は、かろうじて面白い(例: x に比べれば y の方がマダ面白い)と解釈されるし、また、更に面白い(x も面白いが、y の方がマダ面白い)とも解釈できる。前者では、「面白さ」を問題とし(従って、つまらなさをも含む)、後者では、「つまらない」に対して「面白い」が問題にされているのである。「いい」も同様、「いい」が「良さ」、即ち「悪い」も含めて、許容できる範囲を表わす時、「マダいい」は、かろうじていいと感じられ、「いい」が「悪い」と対立する時は、「更にいい」と解されるのである。所謂、形容詞の有標、無標の問題に関わるものと思われる。

- (5) 文接続のマタについては、マター方、マタ更に、マタ同様に、マタ別の見方をすれば、しかしマタ、など、マタにつづく表現により、様々な接続が可能となる。詳細な研究を行なう必要があろう。
- (6) マタは、仏語の mais と類似する部分があることは、KAWAGUCHI (1982) に指摘がある。KAWAGUCHI によれば、「それはマタすごい」は、《Mais ça c'est terrible!》と訳され、「マタなんでそんなことをしたの」は、《Mais pourquoi as-tu fait une chose pareille?》(或いは)《Pourquoi donc as-tu fait une chose pareille》と訳される。ここで興味深いのは、日本語のシカシで、「シカシ、すごいね」、「シカシなんでそんなことをしたの」とも自然に言え、また、シカシは、文接続において、mais にかなり近い意味をもつ(この指摘は、寺村教授による)。従って、マタを mais に結びつけるためには、シカシの検討、mais の検討を行なわなければならないであろう。また、仏語のみならずヨーロッパ諸語で見られる現象だが、Pourquoi diable as-tu fait ça? のタイプの構文を研究する必要もある。

[参考文献]

- MARTIN, R. (1980): "Déjà et encore: de la présupposition à l'aspect", in *La Notion d'Aspect*, eds. par DAVID, J. & MARTIN, R., Metz, (pp. 167-180)
- KAWAGUCHI, J. (1982): "Un grammairien japonais du XVIIIe siècle et la linguistique japonaise", in *Langages*, 68 (pp. 45-62)
- 石神照雄 (1978): 「時間に関する<程度性副詞>「マダ」と「モウ」—<副成分>設定の一試論」, 『国語学研究』18 東北大学 (pp. 26-38)
- 森田良行 (1978): 『基礎日本語 1』角川書店
- 文化庁 (1975): 『外国人のための基本語用例辞典 (第二版)』